一ヵ月の友人

亀山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一ヵ月の友人

【Ｎコード】
Ｎ４２８０Ｐ

【作者名】
亀山

【あらすじ】
彼女が好きだった。具体的には一年前から。
告白をして言われた言葉は「一ヵ月友人として付き合いましょう。
そして一ヶ月後に返事を出します」
さて彼は一ヶ月後彼女と無事付き合うことができるのか？基本的に主人公が彼女を想っているだけです。

0日目　告白からはじまる

彼女がずっと好きだった。具体的には一年前から。
そんなに長い間想い続けてこの間ようやっと告白をする決心がつき、古風だけど彼女の下駄箱に手紙を入れてこうして放課後の教室で彼女と向き合っているわけだ。

オレンジ色の夕暮れの光の中、俺に気づかずに本に目を落とす彼女はさらりと流れる黒髪を耳にかけた。
よほど本に夢中のようだ。そういう俺もよく飽きもせず彼女を眺めていられるものだと思う。
彼女は誰もが振り返るほどの美人ではない。
けれど人好きのする笑顔を浮かべ、傍にいるだけで落ち着く雰囲気に惹かれたのだ。

やっと真正面で見ていた俺に気づいたのか、彼女は戸惑ったように笑った。

「えーと、どうしたんですか？」
「あー、手紙、みたでしょ？」
「ああ、貴方でしたか。ただここにきてとだけ書かれてたので悪戯かとも思ってたんです」

納得したように頷く彼女。ともかく敬語はやめてちょっとツボに入る。
机にうつぶせて悶えてる俺に彼女はあきれたように用事ってなんですか？と聞いた。
俺は机から体を起こし、彼女を正面からしっかり見る。

さあ聞けこの俺の１７年生きてきて初めての告白を！

「好き。だから付き合って」

・・・・・・さすがにこれはないだろう、俺。いくら緊張していたからといっても、これはないだろう。

思わず頭を抱えたくなったが、彼女の反応が知りたいがためにぐっと我慢する。

彼女はというと照れた様子もなく、何やら考え込んでいるようだ。

「もしもーし、俺の話聞いてた？これでもがんばったんだけど」

「顔色が全く変わらない貴方に言われたくないですよ」

彼女はむうと言い返す。ああもう可愛いと思う俺は末期なのか。知っている。

俺の心中など気にせずに彼女はうーんと唸ると静かに口を開いた。

ああもう静かにしろよ俺の心臓。彼女の声が聞こえないじゃないか。

「貴方のその気持ちには応えたいと思います。けれど簡単に答えを出すにしては私は貴方のことをよく知りません」

まあそりゃあそうだよな。俺だって知らない女からいきなり好きだから付き合って！って言われてもはい喜んで！なんて返せない。彼女だったら別だけど。

「なのでお互いを知るためまず友人として付き合いたいと思うんです。あー・・・貴方がそれでもいいなら」

はいよろこんで！

「でもさすがにずっと友人のままというのは酷だと思うんです、私。なので一ヵ月。一ヵ月友人として付き合って一ヵ月すぎたら私、改めて貴方の言葉に返事をしたいと思います」

はいよろこんで！

こくこくと頷く俺によかった、とほほ笑む彼女。
心の中で可愛いともだえつつも表面は平静に取り繕って俺は再度確認するため彼女に聞いた。

「今日は１１月２４日だから１２月２４日？」
「今日はノーカンで。なので１２月２５日ですね」
「あと携帯番号交換。赤外線で」
「あ、わかりました」

もたもたと取りだされる彼女の赤い携帯。ストラップは黒い犬でなぜか本を持っている上に鼻が！になっている。変な趣味だ。
お互いに携帯番号を交換すると彼女はなにか用事があるらしく、俺に頭を下げるとさっさと教室を出て行ってしまった。

気がつくと日が落ちて教室は真っ暗だ。もう出ないと見回りの先生に怒られてしまう。
俺は歩きながらぱかりと携帯を開いて今登録したばかりの番号を呼び出して眺めた。
にやにやと笑いが止まらない。恋人にはなれなかったが、彼女と友人関係になり、彼女の番号が俺の携帯に登録されている。彼女をみているだけだった昨日の俺からなんて進歩したことだろう。

ディスプレイの中踊る文字は加藤　詩織。

それが彼女の名前っていうだけでなんだか愛おしい。

明日が俄然楽しみになって俺は足取りも軽く学校を後にした。

1日目　コロッケパン

朝目が覚めて俺は不安になった。
昨日のことは夢じゃないか？
今までにもリアリティあふれる夢をみてベッドの中で撃沈したことが何度かあるのだ。
よりによってＯＫの返事をもらったところで目が覚めなくとも、と神に恨みごとを言ったりしたものだ。

震える手で携帯を操作すると現れる彼女の名前。
夢じゃなかった。
きっとこのときの俺の顔は気味悪く歪んでいたに違いない。ふへへと言葉も漏れた気がする。よかった、誰もいなくて。

ふと携帯の時間をみるとすでに家を出ていなくてはいけない時間だった。
俺はあわてて家を飛び出す。
これから向かうのはもちろん学校だ。彼女に会える唯一の場所。
俺は走りながら小さくガッツポーズをした。

下駄箱に着くとチャイムが鳴った。
ここでサボる、というなんともだらしない生徒がいるにはいるが、俺はどっちかというと真面目なほうなので先生に軽く怒られながら教室に入る。
席に着くと後ろに座っている坂木が小声で話しかけてきた。
「なぁ、お前なんか嬉しそうじゃね？」
「そう見える？」
そう悪戯気に言ってやると坂木は変な顔をした。なんだよ。

坂木は何か言いたげだったが先生に後頭部をはたかれて黙った。
俺もそれを見て黙って授業に集中する・・・ふりをする。
黒板に並ぶ文字を機械的にノートに写しながら考えるのは彼女のことだ。
きっと真面目に先生の話を聞いてノートにいろんな色のペンでポイントなどを書いているのだろう。そして書いてる途中で先生の話を聴き逃して心の中で慌てているのかもしれない。
そんな彼女の様子が簡単に想像できて俺は机に突っ伏した。
ああくそ、にやにやが止まらない。
そのまま眠りの世界に旅立ってしまったのは昨日遅くまで寝れなかったのが原因だと俺は思う。

授業が終わると誰かに揺り起こされる。なんだよと寝ぼけ眼で顔をあげると前にいたのは坂木だった。
「・・・・・・・・・」
「おい、寝るな。俺の話を聞け」

何事もなかったかのようにまた寝ようとしたら坂木に阻まれた。ちっくしょう、いま彼女とお菓子を分け合って食べるという幸せな夢を見ていたのに。

「そんなにあからさまに不機嫌そうな顔されたらさすがのおれのガラスのハートに傷がつくぞ」
「つけておけ。どうせガラスっていうのはダミーでおもっくそ毛でも生えてる癖に」

ふざけたように言う坂木の言葉を軽く返して俺は小さく欠伸をした。
ああ眠い。
おざなりに姿勢をただした俺をみて坂木は聞く気ありとみなしたのか、どこか楽しそうに聞いてきた。

「で？そんなに嬉しそうっていうことは例の子と付き合うことになったんだろ？」
「ああ・・・いや、別に」
「は？」
意外そうな顔をした坂木に簡潔に事の顛末を伝えようと俺は伸びをしながら言う。
「あ～友達として付き合ってって言われた」
「うわぁ・・・・・・ドンマイ？」
残念そうな目で俺を見る坂木。どこがドンマイだ。彼女との関係が赤の他人から知人をすっ飛ばして友達になれたんだぞ？二段階ＵＰなんてキノコを手に入れた赤いスーパーな奴にもできない芸当だ。あげくに坂木が何かおごってやるというので俺は有り難くその申し出を受け取って５００円を分捕った。

５００円を分捕ったらタイミング悪く先生が来たので俺はその授業を眠りに提供することにした。どうやら坂木は俺が傷心だと誤解しているみたいだからノートぐらい快く写させてくれるだろう。写させてもらえなかったら・・・彼女に言ったら写させてくれるかな。

途中先生に頭をはたかれるというハプニングはあったが、睡眠は十分取れ、腹も立派に空いた。そういえば今日朝飯食ってないや。ということで俺は坂木から提供された５００円を持って売店に急いでいる。
さすがにお昼時だと人ごみは避けられない。
なんとかコロッケパンを手に入れてさあ教室に行こうとすると目に入る黒。
どきり、と心臓が大きく鳴ってどくんどくんと走り出す。
彼女だ。
どうやらコロッケパンと焼きそばパンで迷っているらしい。腰をか

がめて商品の棚に夢中になっている。
今まではこうして眺めているだけだったけど“友達”になった今なら声をかけても不自然じゃない。
だから、落ちつけよ、俺の心臓。

「加藤」
ばくばくとまだ暴れまわる心臓を抱えて彼女の名前を呼ぶ。
彼女がくるりとなんでもないように振り向いた。そして軽く目を丸くする。ちょっと俺の心臓の具合も推し量ってくれ。しにそうだ。
「あ・・・昨日の」
名前を思い出せないのかうーんと唸る彼女に苦笑する。
「谷口だよ。谷口勇人」
「ああ、そう、谷口さん。すみません、私人の顔と名前覚えるの苦手で」
「まあ俺も人のこと言えないんだけど。何？コロッケパンと焼きそばパンで迷ってんの？」
「なんでわかったんですか・・・！」
わかるよ、あんなに一生懸命見比べてたら。
そう言いたくなる口をおさえ、まあちょっとね、と曖昧にほほ笑むに留めておいた。
ずっと見られてるって思われたら彼女に気味悪がられる。彼女に少しでも嫌われるのは嫌だった。
「コロッケパンも焼きそばパンも食べたいんですけどあまり持ち合わせが無くて。飲み物買ったら一つ分しか足りないんですよ」
そう困ったように言う彼女。じゃあ、とおれは右手にあるレジ袋を持ちあげた。
「このコロッケパンやるよ。俺弁当もあるし、どうせ奢ってもらった奴だし」
「え！？駄目です！もらえません！」

「もらってくれないとこまるなぁ」
そう苦笑してみせると彼女はうつむいた。しまった。これじゃあ無限ループだ。
ただ喜んでほしいだけなのに。少し押しつけ過ぎたか、とさっきの言葉を撤回しようとしたら彼女がぱっと顔をあげた。
「じゃ、じゃあ半分！半分下さい！どうせ全部は食べきれませんから！」
そう言った彼女に安心して俺はそれでいいよ、と頷いた。

慌てて焼きそばパンをつかんでレジへと走っていく彼女を見送って俺は人通りの少ない廊下に移動することにした。そこでやっと心臓を落ち着ける。
まさかこんな所で会うと思わなかったから変に緊張してしまった。
俺はちゃんと“友達”として振る舞えただろうか。

俺と同じレジ袋を抱えた彼女を待って適当なベンチに座る。
包装をべりべりにはがして半分に割ったコロッケパンを彼女に挙げると彼女嬉しそうにありがとうと言ってくれた。
よほどこのコロッケパンが好きなのだろう。その好きを少しぐらい俺に分けてくれないかな、なんて取りとめないことを考えてるとふと思いつて彼女に顔を向けてみる。
「お礼、というのもあれだけど」
「なんですか？できる範囲だったら・・・」
そう小首をかしげる彼女に俺は内心ひやひやしながら言葉を出す。
「その敬語やめてくれると嬉しい。ほら、同学年だし」
「え、同学年だったんですか！」
今初めて気づいたという彼女に苦笑する。これでも去年は同じクラスだったんだぜ？というと申し訳なさそうにごめんなさいと謝った。
ああきゅんとくる。
「う・・・てっきり3年生の人かと思ってた」

「そんなに老けて見えるか？俺」
心外だ、と片眉をあげて見せると彼女は慌てたように両手を振った。
「違う！そんなんじゃなくってえーとそう、頼りがいがあって大人っぽいんだよ！」
必死な彼女が面白くてそうか、とついニヤニヤと笑ってしまった。
彼女は引いてないようだからよしとする。
ふと時計を見ると昼休みは１０分ほど経過していた。
「あ、そろそろ俺行くわ。さすがに腹減った」
「え？あ、本当だ。もうこんな時間」
俺がそう言って立ち上がると彼女もぴょんとベンチから降りた。
彼女との時間は名残惜しいが、“友達”としてならこのぐらいだろう。
じゃあ、と手を振っていこうとするとぐい、と手をひかれた。
もしかして、とみると繋がっている彼女の手と俺の手。
ひときわ大きく心臓が鳴った。

「あの、クラス！クラス教えて！」
「あ、うん。Ｄだよ」
私Ｃだ。隣だね、と笑う彼女。知ってるという言葉は声に出なかった。
彼女は何事もなかったかのようにじゃあね！といって去って行った。
俺は緊張の糸が切れてさっきまで座っていたベンチにすとんと腰を下ろした・・・いや、落ちた。たまたまそこにベンチがあっただけだ。

この手、当分洗えねぇ。

まだ手に残る感触とかやわらかさとか暖かさがたまらなく愛おしく

って俺はふにゃりと笑ったのだった。

2日目　登校時間

昨日帰ったあとつい習慣で手を洗ってしまった。

「おっはよー谷口ー」

「・・・・・・坂木・・・・か」

「うおっなんだよその顔。いつもより老けて見えんぞお前」

「・・・余計な御世話だ」

俺はため息をついてまるめがちな背筋を伸ばす。腰のあたりがばきばきいった。

「・・・お前顔だけじゃなく体もやばいのかよ・・・」

「ほっとけ」

軽口をたたく坂木にバッグを投げつけると坂木は冗談だろーと笑いながらバッグを避けてお先ーと下駄箱へ向かい、靴を履きかえた。ちっ

どこか寂しそうに昇降口の床に横たわるバッグを取ろうと身を屈めるとあ、と声が聞こえた。

「た、谷口君・・・だっけ」

「・・・ああ」

驚いた。驚きすぎてああとしか言えなかったよ俺・・・！

すぐ近くに彼女がいた。どれぐらい近いかというと身を屈めてる俺から15センチ離れてるか離れてないかぐらいだ。筆箱に入れる定規にはぴったり。

てそんなことじゃなくて。
慌ててバッグをもって立ち上がる。俺の方が身長は高い。どちらかといえば女子の平均的な身長をもつ彼女は俺を見上げる形となる。ばくばくと鳴る心臓をひそかに抑えながら朝の挨拶を交わす。

「おはよう、谷口君ってこの時間帯なんだ？」
「おはよう、まあ日によりけりだけどな。加藤も？」
「ううん、今日はちょっと寝坊しちゃって・・・」

つい、と苦笑する彼女にときめきながらもちょっと考える。
今の時間帯は８時半。９時に一時間目が始まる我が学校の登校時間としては一般的に理想とされる時間帯だ。なのに彼女はそれでも寝坊をしたのだという。

「ふうん・・・いつもは何時に学校にいるんだ？」
「んー・・・駅につくのは八時かな」
「はやっ！」
「そうかな・・・なんか習慣になってるからそんなでもないんだけど」

おもわずのけ反った。駅から学校まで約１０分。簡単計算でも彼女は８時１０分には学校に来ていることになる。

「５０分暇だろ？何やってるんだ？」
「本読んだり・・・あ、宿題やったりしてる」
「ほうほう」
「だから家で勉強はあまりしないんだよね。悪い癖っていうのは分かってるんだけど」
「いや俺なんて授業前になってやることも多いし、それに比べたらいい方だと思うよ」

うんうん、と頷いて見せると彼女はええーといってはにかんだ。ああかわいい。
ふと登校する生徒が多くなってきて自分たちが邪魔だということに気づいた。
それを彼女に言おうとしたとき、新たに登校した生徒と彼女がぶつかりそうになって俺はつい彼女を抱き寄せた。

「うわ」
「あ、すいませんー」

彼女は女子があげるような悲鳴はあげなかった。生徒は適当な謝罪をして自分の下駄箱へと移動する。まあつったてたこっちが悪いのだけれど。
さすがにそろそろ移動しないと他のやつらにも白い目で見られる。
そのことを言おうと俺は彼女を見降ろした。

「なあ、ちょっと場所かえな・・・」
「ああもうこんな時間！ごめん、谷口君、私次の授業当たるから先行っちゃうね！」

そういえば俺、彼女を抱き寄せてたんだっけ。咄嗟のことだったから意識してなかった。
どくり、とまた心臓が暴れだす。
かあ、と頬が紅潮しそうになるのをどうにか呼吸で抑えていると彼女はもう移動していた。
まあどくどくいってる心臓の音を聞かれずに済んだのは良かったけれどなんというか物足りない。
腕の中にあった温もりが簡単に冬の冷気で冷やされていく。

「・・・・・・・・・・うし」

でも偶然とはいえ彼女と会話ができたし、事故とはいえ抱くこともできた。
これは手を繋いだときと同じくらいいいこと・・・いや、それ以上にいいことじゃないか。
それに彼女の情報をゲットできた。

「明日から早く学校こよう」

俺はそうつぶやくとふへへへ、と小さく笑ったのだ。

2日目　登校時間（後書き）

「なに、谷口くんの遅かったな・・・ってなんだその顔！上機嫌じゃねえか！昇降口でなにやってｔいてえ！」
「坂木うるさい」
「だからってバッグ投げつけるお前もお前だよなぁ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4280p/

一ヵ月の友人

2011年1月8日13時51分発行